

2020年5月3日（日）「空を知り、神を知る」

《聖書協会共同訳》

コヘレトの言葉 1:1-2

1 ダビデの子、エルサレムの王、コヘレトの言葉。

2 コヘレトは言う。空の空 空の空、一切は空である。

《新改訳 2017》

伝道者の書 1:1-2

1 エルサレムの王、ダビデの子、伝道者のことば。

2 空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。

【序論】

今日から新しい書に取り組んでまいります。二つの翻訳を並べて見ていく予定ですが、聖書協会共同訳では『コヘレトの言葉』、新改訳（2017）では『伝道者の書』というタイトルが付けられています（タイトルについては後ほどご説明します）。旧約聖書の中で「知恵文学」の一つに位置づけられており、哲学的・教訓的性格を持ち、普遍的・不朽の価値を持つ文学の中の文学と言われます。著者は人生のあらゆる営みを空しいものと見なし、悲観主義的な世界観を呈示していきます。今日は緒論的な内容（本書はどういう書なのか）になりますが、1:1-2を朗読していただきました。いずれの訳でも「空の空」という訳が採用されています。一度聞いたら忘れることがないでしょう。日本語では「万事は空しきものなり」ということを強調しようとして、「空」という言葉が用いられたのだと思われま（「空」については次回詳しく扱います）。では、まずはそこから問うてみたい。私たちは「人生とは空しいものだ」と考えたことがあるのでしょうか。充実した人生を送っている人にはあまりピンとこない質問かもしれません。むしろ、「人生とはすばらしいものだ」と考えてこられた、あるいはそう教えられてきた方も少なからずいらっしゃるのではないかと。「聖書が『人生は空しい』と教えるなどんでもないことだ」と、反論があるかもしれません。では、少し言い方を変えてみましょう。「自分はいつか死ぬ存在だ」ということを考えたことのない人はいるのでしょうか。幼い子どもでない限り、おそらく誰もが直面してきた問題だと思われま。そういえば、2年前に岐阜県郡上市ぐじょうにある願蓮寺がんれんの掲示板に「おまえも死ぬぞ」という釈尊の言葉が掲げられていたのが話題になりました。当時36歳だった女性がこれを見て衝撃を受け、ツイッターに投稿し、多くのリツイートや「いいね」があったそうです。それだけ多くの人々の共感を得る普遍的な真理だということでしょう。「死」の問題を扱わない宗教はありませんが、本書はまさに真っ正面から死を見つめ、この人生には終わりがあるというところに読者の目を向けさせようとしているのです。

【本論】

本論 1. タイトルについて

まず、本書を理解していくうえでタイトルを検討してみる必要があるでしょう。「コヘレトの言葉」「伝道者の書」という二つの訳のタイトルをご紹介しましたが、元々口語訳では「伝道の書」であったところ（ギリシャ語訳旧約聖書／七十人訳の「Ἐκκλησιαστής／エクレーシアステース」に由来）、新改訳が出たときに「伝道者の書」とされたのです。私は口語訳に慣れていたため、「伝道者の書」という訳に違和感があったのですが、根拠なく批判するのは良くありませんから、なぜそのような訳になったのかを調べたうえで判断することにしました。新共同訳ではヘブル語原本に基づき「コヘレトの言葉」が採用され、聖書協会共同訳でも受け継がれています。

1:1 を原文で読むと「דְבַרֵי קְהֵלֶת דָּוִד בֶּן־חִיטָּן בִּירוּשָׁלַם」（ディブレー・コヘレス・ベーンダヴィッド・メレク・ビエルシャライム）となっています。意味としては「エルサレムの王、ダビデの子、コヘレトの言葉」ですが、「コヘレト」が何を意味するのかがポイントとなるでしょう。この言葉は「集める」「召集する」という意味の動詞（カーハル）の女性分詞単数形であり、正確な意味としては「集会を召集、開催、演説する（preach する）こと／人」です。これは民の代表者の役割であり、神のことばを取り次ぐために人々を呼び集める立場にある人を指すでしょう。そのような職務を実際に担った人物としてイスラエル三代目の王ソロモンが挙げられます（I 列王 8:1, 14, 22）、これらの箇所では民を教え祝福を取り次いでいます。教会に置き換えてみれば、牧師や司教という立場になりますか。ルターは「説教者」というタイトルを付けました。個人的には「コヘレト」では何のことか日本人には分かりませんので、「伝道者の言葉」としてもよいのではないかと考えています。以上の理由から、本講解説教では基本的に「伝道者の書」と呼ばさせていただきます。

本論 2. 著者について

古代ユダヤ教とキリスト教の伝承によると、伝道者の書を書いたのはソロモンだと言われてきましたが、近年の研究ではその可能性は低いとされています。その理由は大きく二つあります。

第一に、本書で使われている言語がソロモン時代（前 970～前 931 年頃）よりも何世紀も後の時代のヘブル語である可能性が指摘されるからです。詳しくお話しする時間はありませんが、本書の文体と用語がアラム語的であることや、フェニキヤ語やカナン語の影響を

受けているという説もあり、ペルシャ語からの借用語が含まれているという見解もあります。仮にペルシャ語の言葉が含まれているとすると、捕囚期後に編纂された可能性が出てきますので、前5世紀以後の文書だということになります。ただ、これらはいずれも明確な執筆時期を示してはおらず、年代を特定することは困難なようです。

ソロモンが直接の著者ではないことを示す第二の理由は、文中にたびたび登場する表現の中に、著者が王ではなく臣下であることを暗示するものが存在することです。

- ・ この州で貧しい者が虐げられ、公正と正義が踏みにじられるのを見ても、驚くな。位の高い役人が見張り、その上にはさらに高い位の者たちがいるのだから。何よりも国の益となるのは、王自らが農地で働くことである。(5:7-8)
- ・ 太陽の下に不幸があるのを私は見た。それは権力ある者が引き起こす過ちで、愚かな者が甚だしく高められ、富める者が低い地位に座している。私は、奴隷が馬に乗り高官が奴隷のように地を歩くのを見た。(10:5-7)

このような、王を非難するような内容を王自身が書くとは考えにくいでしょう。また実際、本書には一度も「ソロモン」という名前は出てこないのです。「**ダビデの子**」という表現は、日本語では直近の息子を想像しやすいものですが、ヘブル語の「ベン」は「息子」とも「子孫」とも取れますから、後代の子孫の可能性も十分にあります。ただ、その内容は明らかにソロモンの人生がイメージされており、地位と莫大な財産を得て、人生でやってみたいことはすべてやり尽くし、類い稀な知恵によって多くの格言や歌を残した人といえば、聖書中ソロモンを置いて他には存在しません。古代において、ソロモンのような重要人物の権威を借りて文書を書くことは珍しくありませんでしたから、無名の著者が「もしソロモンだったらこう語ったにちがいない」と想像して書いた「ソロモンの文書」と結論づけてよいでしょう。

私は長年、伝道者の書を読むときに感じる一つの「むず痒い」感覚がありました。それは、あらゆる快楽を味わった人がそれらを「空しい」「空しい」と言い切ることに對する悔しさのような感覚と言えましょうか。では、そのほとんどを経験しない多くの人にとっては、ソロモンよ、貴様の言う「空しい」という言葉は更に掴み所のないものとして響いてはこないか。経験したうえで「空しい」と言うのと、経験もしていないのだから評価すらできないというのでは、天と地ほどの開きがあるように感じてきたのです。ただ、この書がソロモン自身の言葉ではなく、第三者による客観的評価だとするならば、著者はソロモンの経験をある意味で裁いていることになるでしょう。いえ、それらの経験が「空しい」ものとなるか、真の意義をもつかどうかは、ある一点によって（後述）右か左かに分かれるということが教えられているようなのです。

本論 3. 本書の目的

コヘレトの言葉は人生全般を悲観的に捉え、何事も激しい嘲りの対象とされます。知恵も (1:18)、快樂も (2:1)、笑いも (2:2)、酒も (2:3)、事業も (2:4-6)、財産も (2:7-8)、すべてが最終的にはくだらないものとされるのです。これらは私たち人間が追い求めるものであり、人生の目的ともなり得るものばかりです。そのすべてを知った人が、そこには何も残るものがなかったと結論づける。しかし、その一方で、彼が、腹一杯食べる楽しみ (3:12-13)、仕事の楽しみ (3:22)、富を得る楽しみ (5:18) を肯定しているような箇所も出てきます。そして、所々に神の存在が見え隠れする。その全体的な内容は、思考がグラグラと揺れ動いているかのようであり、二人の人 (悲観論者と信仰を持つ者) が対話をしているのではないかという錯覚すら抱かせます。しかしながら、本書を一人の著者によるまとまりある物語として捉えていくと、一貫したメッセージが見えてくるのです。それは、世の楽しみに没頭する人間の行き着く先が絶望であるということ。人間が極端に走り、永遠に到達できない楽しみを追い求めることに対する警告です。もう答えを申し上げてもうろしいでしょう。神抜きに生きる人生が最終的に辿り着くところは「虚無」であるということです。神との関わりなしに世の楽しみを追求するところには「空の空」という不気味な何かが待ち受けており、知らずに行なった一切のことが実は神の審きの下に置かれていたというとんでもない結果を知ることになるというのです (12:14)。反対に、神を知ると、それまで「空しい」「空しい」と語られてきた一切の物事が変化し、永遠的意味を持つようになる。そのような逆説的なアプローチでもって、コヘレトの言葉は読者を神の許に導こうとしています。「死んだらすべてを失う」という万人に共通した土俵に一度ともに立ち、その上で「神を知る」という新しい展望に向かわせていくのです。その意味で、本書は伝道的な説教と言えましょう。

コヘレトの言葉は、創世記の墮落の記事との関連で理解すると、大変分かりやすくなります。創世記の冒頭で、人類は神との関係を捨て、いのちの源である神の前から追い出されました。そして、地は呪われ、人間はその人生を増大する労苦によって苦しむようになりました。更に、その肉体の終着点は「死」という全き虚無へと向かっていく運命に位置づけられました。そのような人生を「神なしに」歩んだとしたら、人間とはまさしく虚無の中にあるということを伝道者は伝えようとしているのです。主イエスも同様のことを言っておられます。

たとえ人が全世界を手に入れても、自分の命を損なうなら、何の得があろうか。人はどんな代価を払って、その命を買い戻すことができようか。(マタイ 16:26)

【結論】

今日は導入的な内容となりましたが、これから学んでいくコヘレトの言葉の全体像をお伝えしました。人は皆、神なしにその人生を歩み始めます。そして、いつしかこの世の楽しみを追求するようになり、知らずして「空しさ」のうちに人生の幕を閉じていくかもしれません。しかし、神を知るところに人生の営みの意味が見えてくるようになるのです。私たちの労働もまた呪いが解かれ、神への奉仕へと変わる。私たちの性も聖められ、富も神のものとなります。そのような人生に向かわせていくのが、本書の目的です。今日から暫しの時間、この知恵の書、コヘレトからのメッセージに、一緒に耳を傾けていきたいと思えます。

【祈り】

行き先の分からぬ人生を歩む者の導き手となり給う、天の父なる神様。あなたは、道に迷ったアダムとエバに「あなたはどこにいるのか」と声をかけられました。アイデンティティを見失った者たちを、「わたしの許に答えがあるよ」と振り向かせてくださったのです。コヘレトもまた同じところでうろついた人だったのでしょうか。知者ソロモンも、人間が欲しがるすべてのものを手にしながら、迷いの森の中にいました。主よ、私たちにも御声をかけ、真理の道へと引き戻してください。あなたと共に歩む人生は「空しさ」で終わることがないからです。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

生きる目的を見失った者に、やさしき声をかけ給う、父なる神の愛、

「わたしは道であり、真理であり、いのちである」との宣言をもって、全き虚無へと向かう者を引き戻し給う、主イエス・キリストの恵み、

労働も、性も、富も、すべてを「神のもの」として祝福し給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。